

〈資料紹介〉『機関竹の林』

山 田 和 人

書誌

種類 絵尽し（竹田からくり絵画資料）

寸法 縦二一・二種 横一五・五種。

丁数 一八丁半。

形態 半紙本。袋綴じ。

題簽 書き題簽。

機関竹の林／二張鼓竹田大機関／合巻冊（題簽寸法、縦一六・一
種 横四・三種）。

刊年 宝暦七年（一七五七）六月以前（後述）

備考 本書には次の印記がある。表紙見返しに「国立国会図書館
蔵書」「国立国会／25・7・24／図書館」。初丁表に「斑山文
庫」（高野辰之旧蔵）。

なお、丁付は全体として通っていない。

本絵尽しの刊年は、後掲の国立国会図書館所蔵の同名の辻番付によつて知ることができる（多一七七）。同番付には、竹田の紋の下に「大坂竹田近江大掾藤原清宗」とあり、上演場所は「堺町大座」「薩摩掾外記」「座元小倉小四郎」と記されている。さらに番付中に「来ル七月六日より」とあり、七月六日より薩摩外記の劇場で上演したことが確認できる。本絵尽しは竹田芝居が江戸下りした宝永七年七月六日の興行以前であることがわかる。同番付の枠外に「宝暦七丁丑六月吉日」「はんもとさかい町（紋）中嶋屋」と刷られていることから、刊年が宝暦七年六月であり、江戸の版元であることが確認できる。

従来、同絵尽しの刊年は、「宝暦を下らないころ」と推定されてきた（板谷徹「初期変化物の形成とからくり・手妻の影響」（『近世文芸研究と評論』一二号、昭和五一年六月）が、この辻番付によ

って、同絵尽しが宝暦七年六月以前に刊行されたことが明らかになった。その意味でも、同番付は貴重である。なお、この番付は「寛延寶暦番附」に収められている（国立国会図書館デジタルライブラリー）。

この辻番付「機関竹の林」にはからくり「傀儡師」が大きく描かれており、本絵尽しにも「傀儡師當船弁慶」が大からくりとして収められている。「傀儡師」は竹田からくりの中でも人気の高い演目である。また、辻番付に記された演目名の左右の語りには、「小坊主」の踊りと「泰平の御太刀」のからくりが確認できる。「小坊主」の踊りは子供芝居ではいくつかあるが、この番付の「親仁にも娘にもばける小坊主のおとりきやうげん」は、本絵尽しの「御祭陰陽三番三」の小坊主の踊りとは内容が異なっている。というのも、これは親仁にも娘にも化ける小坊主の変化舞踊ではなく、綾玉と棒のほりの田楽踊りだからである。本絵尽しはおそらく大坂、竹田芝居での上演を記したものであり、辻番付に記された江戸興行の時には別の小坊主の踊りが上演されたのだろう。ただし、ともに記されたからくり「太平の太刀」は本絵尽しの「泰平之太刀」と同じ演目である。おそらくこの絵尽しとは同様の演目が「機関竹の林」として江戸下りでも上演されたものであろう。

あらためて本絵尽しを見直すと、初丁表には「機関竹の林目録」

が掲げられている。そこには、踊り・前からくり・狂言・大からくり（二演目）の順で五演目が記されている。そして、八丁裏には包み紙の表が挿入され、そこにはからくり「二挺鼓」の絵が大きく中央に、左に「竹田大からくり」と記されている。九丁表には初丁表と同様の形式（目録）で演目が記されている。すなわち、踊り・前からくり・狂言・大からくりを二回繰り返す形式で八演目が記されている。

書題簽において「機関竹の林」と「二挺鼓竹田大機関」を合わせて一冊と記しているのは、八丁裏に「二挺鼓竹田大機関」の包み紙の表が挿入されているところから、この二種の絵尽しが合冊されているのではないかという判断だろう。だが、「二挺鼓」の包み紙の演目は、「機関竹の林目録」の最後に記されている「相生二挺鼓」のことであり、かりに「二挺鼓」の絵尽しがあつたとしても、後半の八演目の中に「相生二挺鼓」のからくりは記されていないことになる。記されていない演目を表紙として収録するはずはない。しかも、包み紙の体裁ではあるが、そこにはからくりの説明本文が記されており、これも包み紙としては珍しい。理由はわからないが、この包み紙も「機関竹の林目録」の通り、前半の五演目の最後の「相生二挺鼓」を記したものと解すれば、この絵尽しは『機関竹の林』として刊行されており、「機関竹の林目録」の六演目と後半の八演

目を一連のものと考えておく方がいいのではないか。前掲の辻番付「機関竹の林」に描かれた「傀儡師」は、九丁表の目録に掲載されており、十二丁裏・十三丁表にからくりの絵と本文が収録されているのも参考になる。前半の「機関竹の林目録」には収められていないので、両者で齟齬を来すことになるからである。

現状では、本絵尽しを『機関竹の林』としてとらえておきたい。

こうした問題点もあるものの、これほど詳細に演目の舞台を伝える絵尽しは他に類例がなく、竹田からくり研究にとっても最も貴重な資料の一つであることは間違いない。

資料紹介にあたって、本絵尽しの画像を先に掲げ、後半に翻刻を掲載した。絵尽しの場合、絵と本文を一体のものとして理解すべきであるので、画像中の本文の近いところに翻刻本文を配置することにした。こうした体裁も、竹田からくりの絵画資料集を公開するための試みの一つと位置づけて翻刻・紹介した。なお、「傀儡師」の13才において綴じ合わせ箇所で判読できないところを一部補って翻刻している。

翻刻に際して、現在通行の字体としたが、一部旧字をそのまま残したものもあることを断っておきたい。翻刻の後に、参考までに簡単な演目解説を記した。

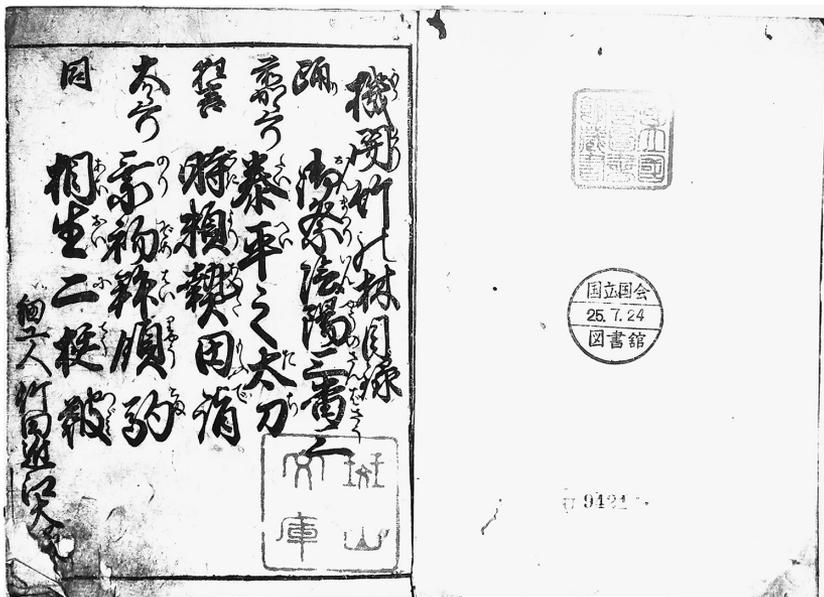
最後に、本資料の掲載許可を認めていただいた国立国会図書館に感謝申し上げます。



〔資料紹介〕『機関竹の林』

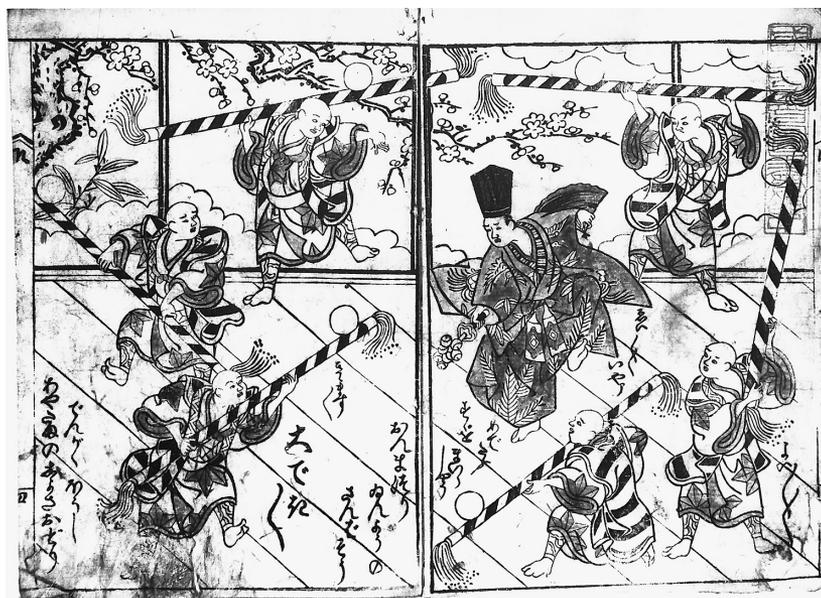


〔表紙〕



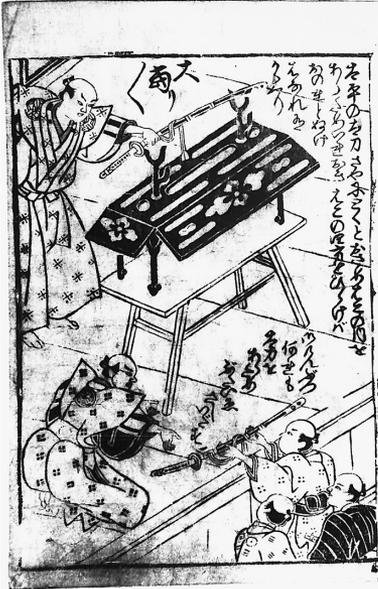
(1オ)

(表紙見返し)



(2オ)

(1ウ)



(3オ)



(2ウ)



(4オ)

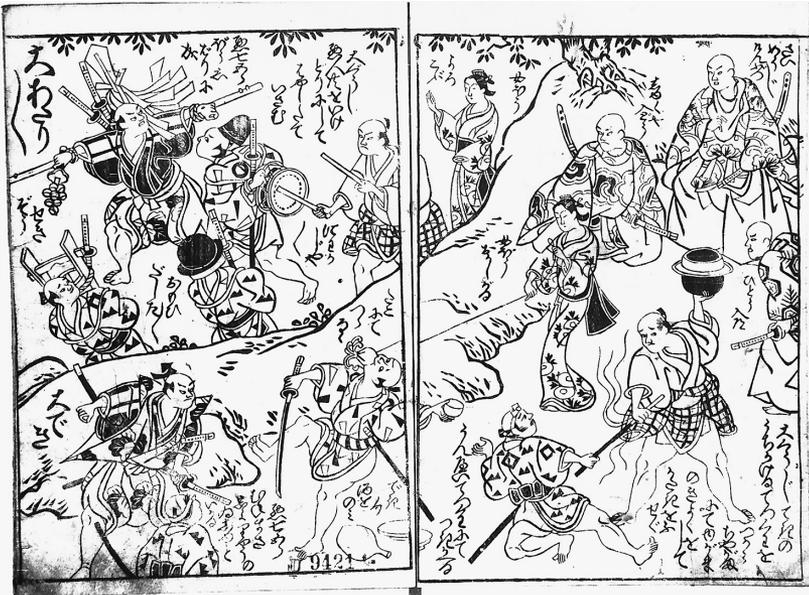


(3ウ)



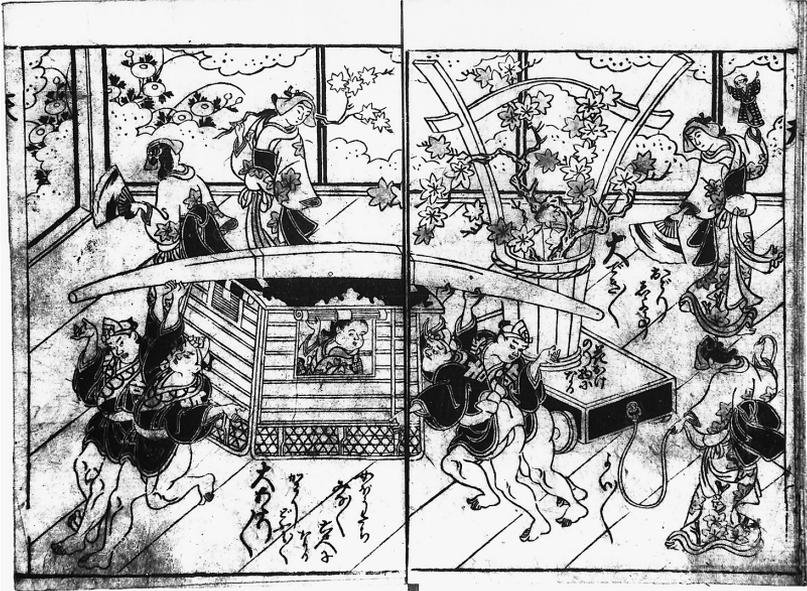
(5オ)

(4ウ)



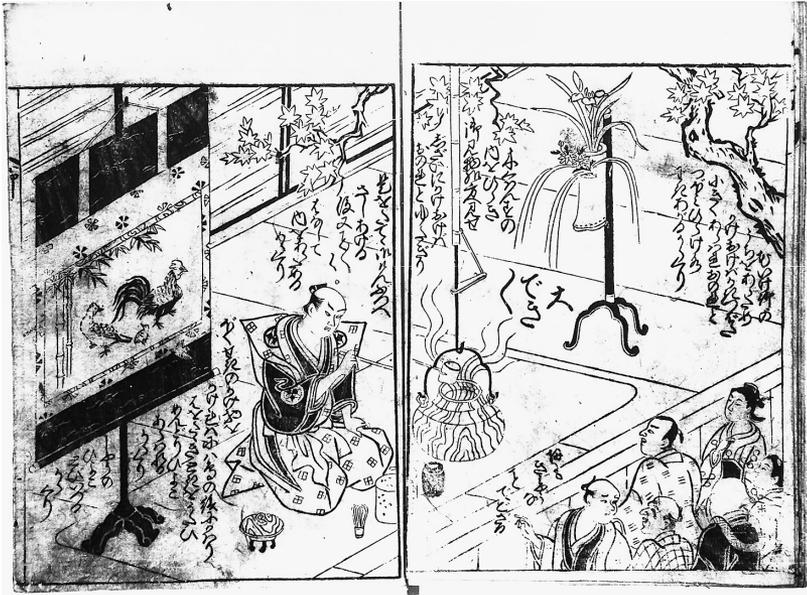
(6オ)

(5ウ)



(9オ)

(8ウ)



(10オ)

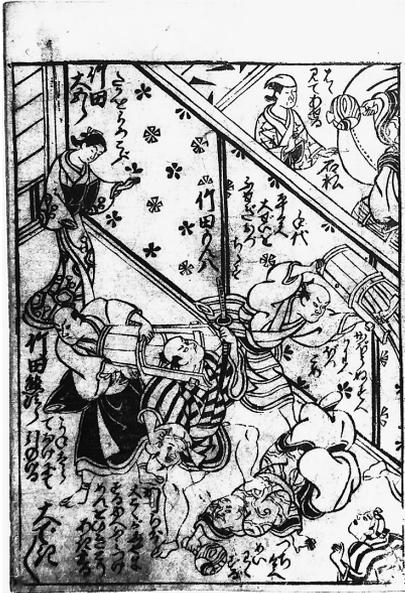
(9ウ)



(11オ)



(10ウ)



(12オ)

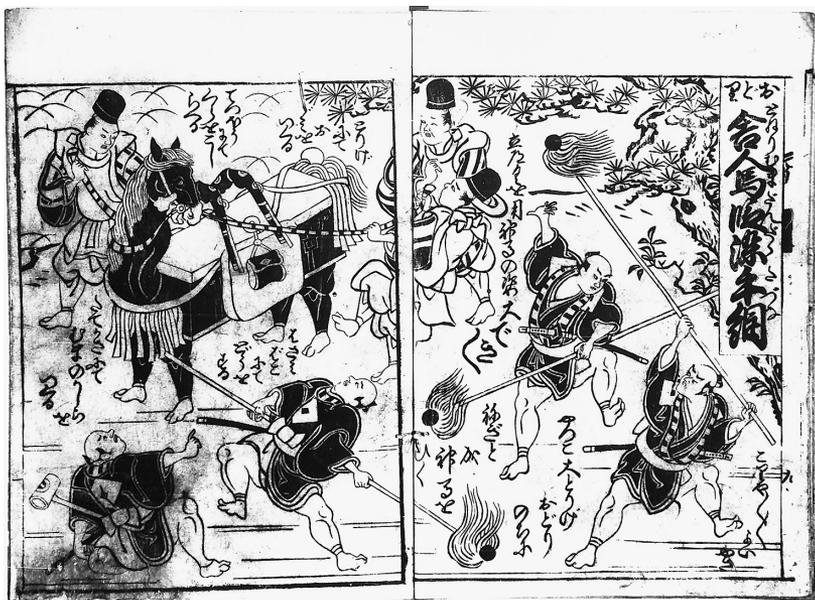


(11ウ)



(13オ)

(12ウ)



(14オ)

(13ウ)



(15オ)



(14ウ)



(16オ)



(15ウ)



(17オ)



(16ウ)



(18オ)



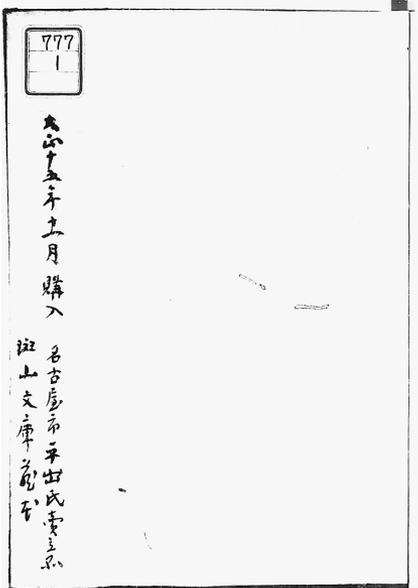
(17ウ)



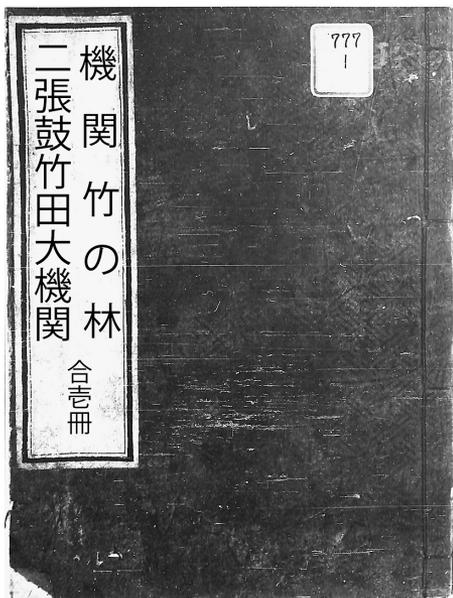
(19オ)



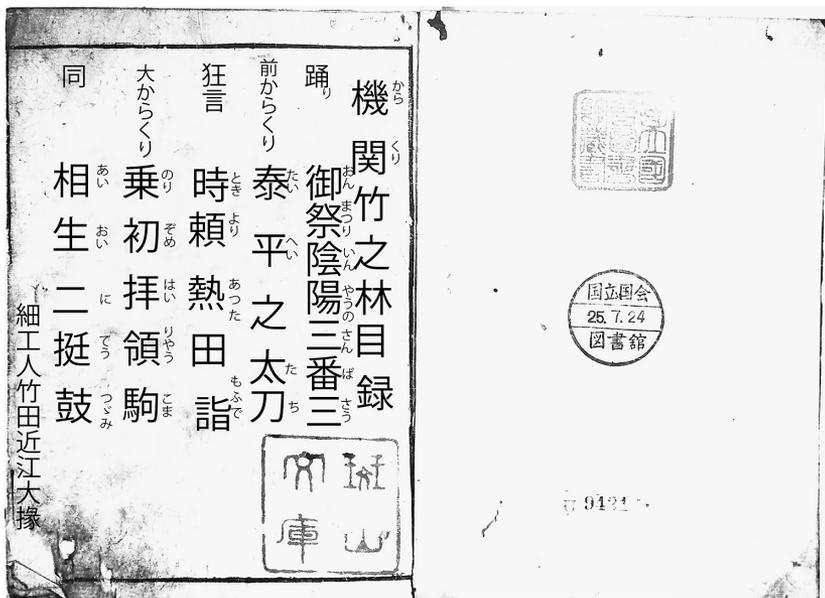
(18ウ)



(裏表紙見返し)

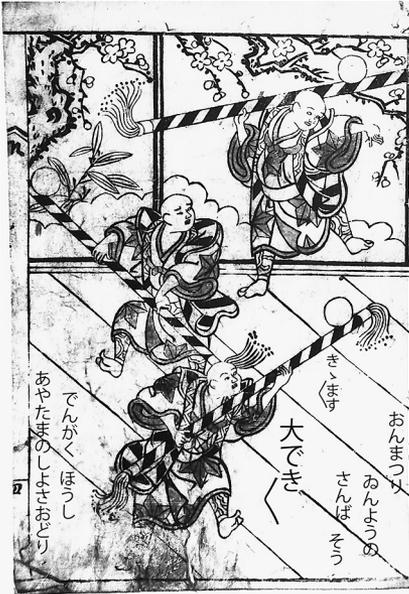


(表紙)



(1オ)

(表紙見返し)



(2オ)



(1ウ)



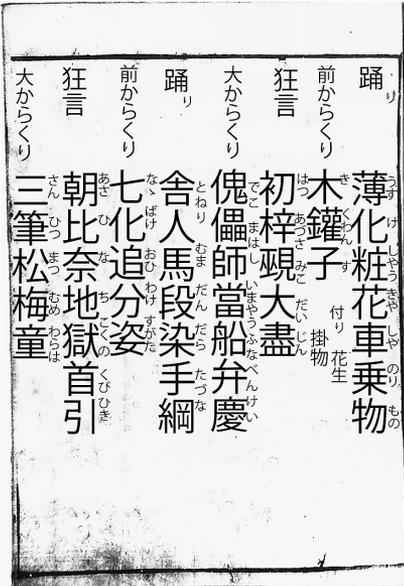
(3オ)



(2ウ)



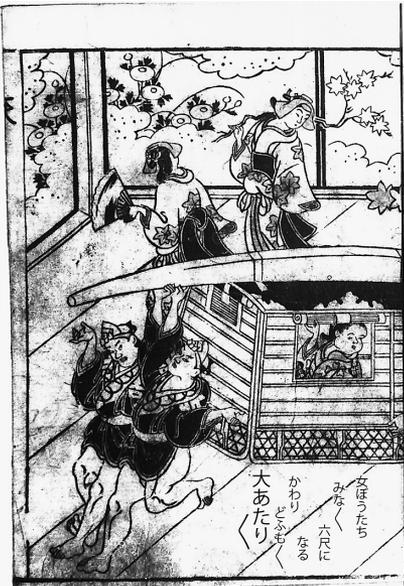
(7ウ)



(8オ)



(8ウ)



(9オ)



(10オ)



(9ウ)



(11オ)



(10ウ)



(18オ)



(17ウ)



(19オ)



(18ウ)

演目解説

御祭陰陽三番三（踊り）

三番三を中心にして田楽法師の小坊主がそれぞれ綾玉をもつて踊り、後に三番三と田楽法師が棒にのぼり踊る。竹田の子供役者による踊りで幕を開ける。『竹田新からくり』（からくり絵本）には、「第一おどり三番三 豊年田植童」として、後半の田楽棒のぼりが描かれている。そこには「すへにいたりかすがの神子とかわります」とあり、本絵尽しにも花笠をかぶり「春日大明神」と書いた幟を手にする神子になった姿が後半に描かれている。『竹田新からくり』の棒上りの小坊主の足下に置かれている花笠は次の展開を示しているのだろう。本絵尽しを入念に見ると、後半の半丁左隅に袖かと思われるものが描かれており、春日明神の神子に変身して踊る姿が描かれていた可能性がある。

泰平之太刀（前からくり）

竹田からくりの中でも定番の前からくりで、上演頻度も高い。内容、刀箱を開けて種も仕掛けもないことを観客に見せて、そこに刀を納めておく。不思議なことに、刀はひとりでに鞘から抜け出ており、箱を開けてみると、抜け出た刀の身と鞘が並んでいる。また、

そのまま箱を閉じておくと、刀身は自ずと鞘に納まる。考えてみると、刀を抜くためにはそれだけの長さの空間が必要であり、限られた箱のスペースでは刀が抜けるはずもない。そこがからくりの見せ場である。時には観客に刀を改めさせたり、口上人がことば巧みに種も仕掛けもないことを語り、観客の興味をそそる。結局元の鞘に収まるというところから幕開きの祝儀的なからくりとして重宝されたものか。

時頼熱田詣（狂言）

尾張熱田の大宮司が所領を悪七五郎むねまさに横領されて、今は神社の鳥居前の水茶屋の亭主となっている。最明寺入道（北条時頼）はしゆくや入道、びとう入道とともに都の勅使と偽り烏帽子直垂姿となって、熱田大宮司の本心を探ろうと熱田詣でをする。しゆくや入道が水茶屋の女房に濡れかかったり、巫女となって舞っている女房にちよっかいを出したりする度に亭主が愠気する。やがて亭主と女房が三大臣の前で舞の所作をする見せ場となる。大宮司は、勅使になりました「しゆくや入道」と「びとう入道」の正体を見破り、二人を懲らしめるのを見て、最明寺入道は水茶屋の亭主が熱田の大宮司であり、女房がその妻であることを見抜き、本領安堵する。その後、本領安堵の件で意趣を抱く悪七五郎むねまさが家来と

ともに押し寄せるが、逆に大宮司に懲らしめられ、むねまさも棒縛りにされ、一同追いやられて幕となる。全体として滑稽を旨とする竹田芝居の子供狂言である。

『機関千種の実生』（からくり絵本）第一には「子供狂言 時頼熱田詣」として、ときより入道、びとう入道、しゆくや入道、大ぐうじ、大ぐうじ女ぼう、うさみのむねまさが描かれている。役名と役者名のみだが、本文として「ほんりやうあんどしてやらぬまいのてい」とあり、大宮司夫婦の連れ舞いの所作が描かれており、むねまさの本領安堵を退けるという意味かと推定される。

乗初拝領駒（大からくり）

曲馬（馬の曲乗り）のからくり。最初は、乗り手が鞭を当てて地道を走り曲乗りをして、鞍に片足で立ったりして輪乗り（輪形に馬を乗りこなす）をする。次に、馬を乗り捨て、乗り手が籠脱け（長い筒上の籠を飛んで抜ける）をする。その後、乗り手の人形が籠の向こうの綾棒に取り付き、乗り換えの馬に跨がる。すべて離れ物のからくりである。これも人気の高いからくりのひとつである。『竹田新からくり』第四「からくり拝領曲馬乗初」として輪乗りと籠脱けが描かれている。籠脱けの後に馬に乗るのではなく、生き物の犬に跨がって楽屋に走り込むとあり、この点が本絵尽しと異なる点で

ある。『若楓東雛形』（からくり絵本）第四「からくり乗初拝領駒」として、『竹田新からくり』と同様に最後は生きた犬に人形が跨がり、楽屋へ走り込むとある。演出によって異なるのだろうか、最後はおそらく生き物遣いとして犬に乗って退場させたのだろう。本絵尽しで、馬に乗るのが狂言『止動方角』の太郎冠者であるとしているのは、からくりの口上人がおもしろおかしく語るためであろう。

相生二挺鼓（大からくり）

二挺鼓を打つ演技が描かれており、最初は三味線を弾き、次に大の鼓を打ち分ける二挺鼓のからくりである。『竹田新からくり』第五「からくり三弦二挺鼓」として、五歳に成長して三味線で吉野山を弾き、続けて二挺鼓で「高砂」の切を打たせるとある。実は、このからくりは三歳から十歳に至るまでのこどもの成長に応じて、演技をするように演出されており、三種のからくりで構成されている。ただし、それぞれが単独で上演されることもある。『竹田新からくり』では、三種のからくりが連続して演じられている。本絵尽しでは、大からくりとされているところから見ると、あるいは三種のからくりを演じた可能性も考えられる。

薄化粧花車乗物（踊り）

はじめは下がり帽子をきた女中が花桶を引き出して踊る。次に女中が六尺と変わり、花桶車を乗物に仕立てて踊る。女中から六尺へと変わる変化舞踊である。『竹田新からくり』第四「おどり花車乗物」とあり、女中が六尺に変わるときに、三尺手拭いを頭に巻くのである。また、同図では、六尺が乗物の一部を手にしているので、役者が道具を舞台上で転換しているらしい。役者の早替わり、道具の速やかな転換が見せ場である。『機関千種の実生』第四「おとり風流花車駕」にも、花桶車を引く二人の振り袖の女方が後に六尺となって花桶が乗物に変わったところが描かれている。

木鐘子 付り花生 掛物（前からくり）

木製の茶釜の内を改めて掛けておくと自ずと湯がたぎるという不思議を見せるからくりであり、その湯で茶を点てて客に振る舞う。その後再び茶釜の内を見せて種も仕掛けもないことを示す。花生けも内を改めて掛けておくと、かきつばたと小菊のつぼみが開いて水が湧き上がる。墨蹟の掛け軸をかけると墨蹟が鶏の絵に変わり、羽ばたきをしたときの声をあげ、雌鳥とひなが現れ、やがてひなが掛け軸から飛び出すからくり。舞台を茶室に仕立てて、花生けや掛け軸を飾り、木製の茶釜で湯を沸かし、口上人が茶を点てて客に振る

舞うという趣向であり、三種のからくりが複合統合型で演出されている。

初梓現大盡（狂言）

傾城との恋故に大黒屋の主人である父親槌兵衛から勘当を受けた米太郎は、手代の平兵衛の手引きで、傾城たかをは梓巫女に、米太郎はその母となつて、大黒屋にもどる。巫女の口寄せによつて米太郎の艱難辛苦を知り、父母は勘当を許す。その後、男伊達の頭が身請けされたたかを水あぶせ（水祝）の日に連れ去ろうとする。手代の平兵衛と米太郎の活躍で一味を撃退する。父親兵衛が大黒に化けて対抗するところも滑稽な見せ場だ。『竹田新からくり』第五「子供 初梓巫大臣」には半丁で大黒屋槌兵衛と女房、米太郎とたかを、伊達男の一味を退散させる場面が描かれているが、これだけの描写では詳細をつかむことはできない。本絵尽しによつて、およその展開を把握することができる。

傀儡師當船弁慶（大からくり）

最初は、歌三味線にあわせて、傀儡師（首から提げた人形の箱の上で指人形芝居を演じた大道芸人）の首から提げた箱から登場した唐子の人形が、両手にチャップパ（小さなシンバル）を持って踊り、

その後、傀儡師の人形の上半身が箱の中に畳み込まれ、場面が転換して「船弁慶」となる。海上に出現した、義経主従を恨みに思い、薙刀を振り回して荒れ狂う怨霊平知盛を弁慶が祈り伏せる。この場面は謡曲の文句をそのまま用いている。その後、再び、傀儡師がもとの姿となり、箱の中から山猫が登場し囃子に合わせて動作して、最後に観客の方に飛び出していく。

竹田からくりの中で最も人気の高い演目の一つであり、絵画資料の残存数が一番多い。これと同種のからくりが愛知県半田市亀崎田中組神楽車「傀儡師」として現在も伝承されており、その演技と構造を知ることができる。竹田からくり研究の一等資料である。その詳細については「竹田からくり「傀儡師」について―フィールドと文学史の接点―」（『歌舞伎研究と批評』一二号、一九九三年二月）等を参照のこと。

舍人馬段染手綱（踊り）

まず、奴の大鳥毛踊りがあり、その後、大名行列の立道具で神馬を作り、奴が舍人の姿になって段だらの手綱を引く。『機関千種の実生』第一「おどり馬洗伊達染手綱」と『若楓東雛形』第二「おどり馬洗伊達染手綱」には、同じ演目が収められている。奴踊りの後、大名行列の諸道具で神馬を作るとあり、諸道具は本絵尽しと一致し

ている。また、『若楓東雛形』には、手綱について奴の半纏の襟を解いて手綱とするところがある。おそらくそれでよいのだろう。段だら模様の手綱の意味がはっきりする。

七化追分姿（前からくり）

大津絵（大津の追分、三井寺周辺で参詣の土産に売られた庶民的な絵）の人形の七変化のからくり。藤の花を肩にかけた娘、鬼の念仏、若衆の枕返し、座頭の三味線弾きへと、一体の人形が次々に変化していく。次に奴の人形が酒をのみ顔を赤くして姿を瓢箪坊主に変える。奴の座っていた酒樽が鯨となり、瓢箪坊主とともに瓢箪鯨の絵姿となり、鯨が舞台を動き回り楽屋へと入っていく。大津絵の画題が次々とからくりで演じられていく。『機関千種の実生』第五「前からくり七化追分姿」では、藤の花を持つ人形、鬼の念仏、若衆の枕返し、座頭の三味線と、藤娘の人形から座頭まで一体の人形が四態に変化するからくりだけが記されているが、本絵尽しと同様に酒飲み奴、酒樽から鯨、そして瓢箪鯨へと変化し、七変化となったものと推測できる。

朝比奈地獄首引（狂言）

地獄で閻魔大王が俱生神、牛頭馬頭らとともに罪人を吟味してい

る。その責めのありさまも滑稽である。そこに鏡研ぎとその女房が引き立てられてくる。閻魔はその女房に濡れかかる。鏡研ぎは何とでもできず悔しがる。そこに朝比奈がやってくる。朝比奈は牛頭馬頭が合力する閻魔大王と首引きして、見事大王を打ち負かす。鏡研ぎと女房は大いに喜ぶ。竹田芝居の子供狂言として閻魔と朝比奈の首引きは評判もよかっただろう。絵尽し『竹田大絡繰』「おどけ狂言地獄の首引」には鏡研ぎ女房に閻魔大王が濡れかかるところと牛頭馬頭の前で閻魔と朝比奈が首引きをするところが描かれている。本絵尽しのようにその後牛頭馬頭が合力するのだろうか。

三筆松梅童（大からくり）

菅丞相（菅原道真）の人形が、額や机上の紙に「梅」「松」「桜」の三文字を書く文字書きのからくり。ただ書くのではなく、左右の手で同時に「まつ」「さくら」の文字を書き、その後口にくわえた筆で「うめ」の文字を書く。松童子の人形は、二筋の綱を逆立ちで渡り、その間片手ずつ放して見せ、最後に人形が鉢植えの松となる。梅童子の人形は、台を離れて篠竹に取りついて竹をたぐって渡り、最後に人形が鉢植えの梅になる。ぜんまいの細工物からくり。『竹田新からくり』第一「からくり天満神和合書始」で、左右の手と口筆で「梅」「さくら」「松」の三文字を書かせ、次に唐子が逆立ちを

して片手を放して綱を渡り、後に梅の木の石台（鉢植え）に変わる。さらにもう一体の唐子が松の木の石台となるからくりとある。本絵尽しは、文字書き以外の、梅童子、松童子の曲芸と鉢植えへの変化を詳細に記しており、資料価値が高い。

右の解説に引用した絵画資料の刊年を参考までに次に記す。

からくり絵本『竹田新からくり』宝暦八年（一七五八）正月。

からくり絵本『機関千種の実生』明和四年（一七六七）頃。

からくり絵本『若楓東雛形』明和四年（一七六七）頃。

からくり絵尽し『竹田大絡繰』安永六年（一七七七）三月。